

令和4年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報 告 書

令和5年3月

公益社団法人日本写真家協会

1 はじめに

世界の様相を一変させたコロナ禍が4年目に入った。波動的な高まりを見せる流行が終息したわけではないが、ワクチン接種がほぼ行き渡り、社会の慣れもあって日常的な暮らしは取り戻せつつある。

コロナ禍による社会変化の顕著な現象のひとつとして、アナログからデジタルへの急速な移行が挙げられる。それにともない、われわれ写真界が直接的に被った事象として、グラフ・メディアや出版物の激減により、作品発表の機会が大きく失われたことを挙げなくてはならない。さらにはスマートフォンの撮影機能とSNSの革新的な進化によって、誰もが、どこからでも映像情報を瞬時に発信できる利便性を手にしたことで、映像はただで見るものという社会通念が急速に定着してしまったことである。

こうした状況下にあって、アーカイブ写真をも含めた、写真の記録性が有する価値観をどう伝え啓蒙していくべきか、日本写真家協会としても苦心しているところである。

日本写真保存センターが行ってきた、歴史的写真原板の収集、保存活動は、開設以来の既定路線に沿って粛々と進められてきたが、これまでややともすれば、より多くのフィルム収集を目指そうとする傾向があり、長きにわたって多量の未整理フィルムを抱えてしまっていたことが否めない。そのために倉庫代をはじめとする保管費用がかさむ傾向にあったことを大幅に見直し、今年度からは、収集を控えめにして、まずは、累積していた原板の調査整理を早めることに重点をおく運営を心がけてきた。これによって、保管費、包装材料費等をはじめとして全般的にスリム化を図ってきた。

フラットベッドスキャナーを使つてのデジタル化を発足当初より行ってきたが、最近のデジタルカメラ性能の飛躍的向上を踏まえてテストを繰り返した結果、カメラによる撮影の方がより高品質、しかもスピーディーであることが判明したことで、カメラ撮影によるデータ化を優先して採用していくこととした。これに伴いデータ保存のためのサーバー増強にも取り組んだ。

さらに、大幅な経費節減と作業面での環境整備を図る目的で、保存センター事務所をこれまでの台東区台東から、千代田区神田紺屋町に10月1日をもって移転した。

これらの見直しは、写真保存事業の継続、発展を目指すための一環として行ったもので、さらにデジタル時代により機能的に対応するために、従来のwebページの改善を図り閲覧への利便性を高めていくことに着手したい。

野町 和嘉（公益社団法人日本写真家協会会長）

目 次

1	はじめに	3
2	本調査の概要	6
2.1	調査研究の目的	6
2.2	調査研究の趣旨	6
2.3	調査研究の内容	6
3	本年度の調査研究の実施概要	8
3.1	題目	8
3.2	実施時期	8
3.3	調査研究の内容	8
4	業務実施体制と実施内容	10
4.1	調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿	10
4.2	課題項目別実施内容	11
5	本年度収集・調査した写真原板について	12
5.1	本年度の写真原板の受入数及び保存庫入庫数	12
5.2	本年度収集・調査した写真原板 総論	15
5.3	調査した写真原板詳細	16
6	スキャン画像高画素化への取り組み 一利活用拡大へ向けて一	18
6.1	背景	18
6.2	仕様の策定	18
6.3	撮影手法（2種）	20
6.4	撮影の工夫	21

6.5	コンタクトシートの大量作成	21
6.6	今後の課題	22
7	情報発信	23
7.1	本年度の情報発信と利活用	23
8	支援組織	27
8.1	支援組織設立の経緯と支援組織会員	27
8.2	支援組織の沿革	28
8.3	支援組織の支援内容について	28
8.4	今後の支援体制と保存センターの改革について	29
9	まとめ	30
図 版		31

2 本調査の概要

2.1 調査研究の目的

わが国の時代を色濃く記録した歴史的あるいは社会的、芸術的に貴重な写真原板（フィルム及び乾板等）は、プリントと同様に時を経て価値をもった写真として評価される。しかし、これらは年月の経過とともに劣化、散逸、廃棄の危機に直面している。そのため、その写真原板の収集、調査を行い、後世に残していくための保存管理を図る。また、アーカイブ化して公開し、写真文化の振興と発展に役立てると同時に、社会文化の研究や学術、教育、マスメディア等における利用促進を図り、もって国民文化の向上に寄与することを目的とする。

2.2 調査研究の趣旨

日本の近現代が記録された写真には、今では見られない文化財や建物・風景、歴史的出来事や災害、また日本人の暮らしや日常、地域文化などの貴重な映像が残されている。そのため、時間的経過による写真原板の劣化が進んでいる 1945 年から 1970 年代の写真原板を重点的に収集することを基本方針とする。また、この時期の前後であっても撮影者の物故などによって散逸・廃棄の危機に直面した価値ある原板は積極的に収集を図る。

収集した写真原板は、インターネット上で閲覧できるようにするため、画像のデジタルデータ化を行うと共にデータベースに撮影者、撮影日時、撮影場所などの情報を記録する。原板自体は長期保存に適した包材に入れ替えて、最終的には国立映画アーカイブ相模原分館で保存する。

また、画像の利用については、様々な分野や用途に対応できる画像データを作成・保管するための研究を進めるとともにデータベースの利便性向上を図っていく。

2.3 調査研究の内容

①諮問委員会の設置

調査研究を行うにあたり、写真史、フィルム保存技術、著作権権利処理、利活用、デジタルアーカイブに関わる専門家による諮問委員会を設置し、具体的な活動方針を図るための意見聴取を行う。

②写真原板の収集

日本写真家協会に設置した写真保存センター委員会により、写真原板の所有者の選定や収集の交渉を行う。

収集する写真原板は、撮影者、撮影日時、撮影場所などのメタデータが明確になっている写真集や雑誌、新聞等の出版物および写真展などで発表された作品を中心とする。

③権利処理

所有者との権利処理は、日本写真保存センターへ著作権が譲渡される「寄贈」契約を原則としているが、状況によっては著作権が撮影者や所有者側に維持される「寄託」契約を容認する。

④写真原板の調査と目録の作成

収集した写真原板の情報管理を行うためのデータベースを構築する。

データベースは管理者用のデータベース（管理データベース）と一般者向けデータベース（閲覧データベース）に分けられる。管理データベースには、写真原板自体の劣化状態や画像点数、撮影者、撮影時期、撮影場所、使用された出版物などの情報を記録し目録を作成する。また、写真原板の画像のデジタルデータ化を行い、写真原板データベース（閲覧データベース）にて一般の方が閲覧できるようにする。画像公開にあたっては、著作権等の権利処理を行い、被写体の肖像権や所有権などの権利についても研究を進め、公正な公開基準の指針を構築する。

⑤写真原板の保存方法

写真原板の劣化状態を検査紙で確認したうえで、長期保存に適した中性紙の包材に入替え、フィルムの保存環境が整っている国立映画アーカイブ相模原分館のフィルム保管庫（125m²×4部屋の合計 500m²、室温 10℃、湿度 40%RH）で保存する。

⑥写真原板の利活用

日本写真保存センターの活動内容を公開しているホームページと、調査した原板の情報を公開している写真原板データベース（閲覧データベース）の認知度を上げていくための活動を行う。その一つとして、様々な資料を収集・公開している他の機関との連携を進め、保存センターが保有する写真を紹介する機会を増やしていく。また、より多くの写真家や分野の写真を見ることができるよう、写真原板データベースで公開する画像点数の増加を図ると共に、検索や閲覧システムの改良を進め、データベース利用者の利便性の向上を進めていく。画像データの利用貸出しにも積極的に取り組み、利用者の用途に合った画像データの作成とデータ保存方法について、作業方法の確立を進める。

3 本年度の調査研究の実施概要

3.1 題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
（「写真フィルムの収集保存・活用に関する調査研究」を含む）

3.2 実施期間

令和4年4月契約締結日から令和5年3月31日まで

3.3 調査研究の内容

(1) 写真原板の収集

本年度は、過去に収集した未調査の原板調査作業を重点的に進めるため、新規の原板収集は初期調査が年度内中に完了可能な最小限の数量に抑えた。その結果、国立映画アーカイブ相模原分館への原板の年間入庫数が過去最高となった。

このような中、1名の写真家と1団体からの追加収集を行った。

写真家では、日本初の女性報道写真家として知られ、2022年8月に107歳で亡くなった笹本恒子さんの家族より、ご存命中に2回目の追加寄贈があった。（1回目は2017年12月寄贈）

また、広島平和記念資料館から昨年度に引き続き追加での保存の依頼を受けた。

(2) 写真原板の調査状況

写真原板の調査は、写真原板や資料を受取った時の整理状態や数量など全体を記録する「初期調査」と、その後に原板一本ずつの詳細な状態や公開するコマの撮影日時・場所などを記録する作業およびデジタル画像を作成する「本調査」の2つがある。本年度調査を行った内容は以下のとおりである。

○初期調査

大東元、笹本恒子、広島平和記念資料館

○本調査

岩波書店『岩波六大寺大観』を始めとする大観シリーズ、岩波書店『岩波写真文庫』、杵島隆、岩宮武二、高野伸二、佐伯義勝、芸艸堂、ブリストル・ホレス、写真協会、広島平和記念資料館

なお、本調査が完了した写真原板は国立映画アーカイブ相模原分館に入庫を行った。

(3) 写真原板のデジタル化の方法変更

写真原板のデジタル化は、出版物に使用されたコマだけでなくその前後に撮影されたコマも同時に記録するために、昨年度まではフィルムホルダー1本単位でフラットベッドスキャナーでスキャンしデジタル画像作成を行ってきたが、本年度より高画素のデジタルカメラを使用して複写する方式に変更した。この理由は、利活用を促進するうえで高精細な画像を要望されることも少なくなく、汎用性のあるデータ作成と保存をすすめることとした。

また、複写撮影時は従来通りフィルム画像全コマを撮影し、コンタクトシート状に加工して一覧できるようにした。このことは撮影者が現場でどのような行動をとったか、何を発見し、どんな感動を覚えたか等の状況を掴むことが可能になり、作家研究や作品の制作過程の調査に役立てるためでもある。また、出版物などで公表された画像を照合する際にも必要となってくる。

(4) データベースの改修

本年度は、過去に収集した未調査の原板調査作業を重点的に進めたため、データベースの改修は実施していない。

(5) 写真原板の利活用と広報活動

保存センターが保管している写真原板画像や撮影情報は、調査や権利処理が完了したコマより順次閲覧データベース（写真原板データベース）で公開している。

本年度は2,329点を追加し、2023年3月末現在では22,742点となった。調査作業の工程の関係で昨年度の追加コマ数7,314コマには及ばなかったが、2020年度より急速に増加しており、3年前の2020年3月末時点と比較すると3.37倍となった。本年度も『岩波写真文庫』掲載写真が追加したコマの約半数を占めている。また、芸艸堂より寄贈された大正時代にガラス乾板で撮影された『歴代風俗写真集』掲載の写真216点は、保存センターが収集した原板の中で最も古い時期のものとしてデータベースに登録した。

一方、利活用の状況を把握する指標として、このデータベースの閲覧数を調査している。閲覧数の詳細は「7 情報発信」に記載しているが、PV数は昨年比95.1%と初めて減少した。昨年度まではジャパンサーチとの連携などによりずっと増加していたが頭打ちとなった。ジャパンサーチでは、「ギャラリー」機能を活用して、本年度も保存センターが持っている特徴的な写真を4件紹介しており、SNSでも掲載写真についての書き込みがあるなど浸透しつつあるが、今後は更にジャパンサーチを活用しての情報発信方法を検討していく。

また、保存センター自体のホームページについては内容を見直すことが課題となっているが、写真原板の特徴を活かした、より興味を引くようなデザインされたホームページ作りを進めていく。

本年度の画像データの利用に関してはこれまで同様に出版社からの出版物掲載やイベント、写真展での展示、テレビ番組での放送など多岐に渡ってあった。

利活用促進のための対外広報活動については、本年度も国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局主催のジャパンサーチのオンラインセミナーに参加し、写真原板データベースとジャパンサーチとの連携と活用事例について報告を行った。

飯島 幸永（公益社団法人日本写真家協会理事）

4 業務実施体制と実施内容

4.1 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

事業実施組織

公益社団法人日本写真家協会

統括部門

代 表	田沼 武能（一般社団法人日本写真著作権協会会長 公益社団法人日本写真家協会名誉会長）	令和4年6月1日逝去
代 表	野町 和嘉（公益社団法人日本写真家協会会長） 山口 勝廣（公益社団法人日本写真家協会副会長） 高村 達（公益社団法人日本写真家協会副会長） 島田 聡（公益社団法人日本写真家協会専務） 山口 規子（公益社団法人日本写真家協会常務） 小池 良幸（公益社団法人日本写真家協会常務） 飯島 幸永（公益社団法人日本写真家協会理事） 壹貫田 剛史（一般社団法人日本写真著作権協会常務理事） 棚井 文雄（一般社団法人日本写真著作権協会常務理事）	

諮問・調査部門

諮問委員会

委 員	北村 行夫（虎ノ門総合法律事務所所長・弁護士）
委 員	大亀 哲郎（日本ユニ著作権センター企画室主任研究員）
委 員	高橋 則英（日本大学芸術学部写真学科 特任教授）
委 員	多田 亜生（元岩波書店美術書編集者）
委 員	谷 昭佳（東京大学史料編纂所史料保存技術室 技術専門職員）
委 員	田良島 哲（東京国立博物館 特任研究員）
委 員	鳥原 学（写真評論家）
委 員	丹羽 晴美（東京都現代美術館事業企画課長・学芸員）
委 員	丸川 雄三（国立民族学博物館人類基礎理論研究部准教授）
委 員	山口 孝子（東京都写真美術館保存科学専門員）
委 員	吉野 弘章（東京工芸大学学長）

補助員	井上 六郎（公益社団法人日本写真家協会会員）
補助員	内堀 タケシ（公益社団法人日本写真家協会会員）
補助員	玉城 尚俊（公益社団法人日本写真家協会会員）
補助員	寺師 太郎（公益社団法人日本写真家協会会員）
補助員	根岸 亮輔（公益社団法人日本写真家協会会員）
補助員	野田 知明（公益社団法人日本写真家協会会員）

調査作業部門

事務局長	山崎 正典
調査員	笛木 諭
調査員	坪田 宣政
調査員	幸田 沙也子
調査員	中辻 利枝子
調査員	河原 健一郎（令和4年9月30日退職）
調査員	渡邊 英雄（令和4年9月30日退職）
調査員	鈴木 博憲（令和4年9月30日退職）

4.2 課題項目別実施内容

実施月	事項	概要	詳細
4月	会議	関係者合同会議	保存センター運営と改革に関する協議
	広報	利活用	ジャパンサーチ・ギャラリーへの情報掲載「素顔の首相」
	会議	諮問調査委員会	令和3年度事業報告・令和4年度年間計画
	会議	支援組織	令和3年度事業報告・令和4年度年間計画
5月	収集	写真原板の収集	笹本恒子
	会議	写真保存センター委員会	画像データ高精細化の作業状況確認
	調査	資料保管の見直し	共進倉庫保管資料の調査・整理作業
6月	調査	資料保管の見直し	共進倉庫保管資料の調査・整理作業
	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	会議	写真保存センター委員会	寄付返礼品についての検討
	広報	利活用	ジャパンサーチ・ギャラリーへの情報掲載「空中写真で見る変わりゆく東京の風景」
7月	会議	関係者合同会議	保存センター運営と改革に関する協議
	会議	写真保存センター委員会	データストレージ増設に関する協議
	広報	利活用	ジャパンサーチ・ギャラリーへの情報掲載「岩波写真文庫 247 徳島県 - 新風土紀 -」
8月	広報	セミナー参加	「ジャパンサーチ」連携事例紹介
	広報	利活用	ジャパンサーチ・ギャラリーへの情報掲載「『写真週報』掲載写真と関連資料で見る戦時下の子どもたち 2」
9月	保存	資料保管の見直し	渡辺義雄大型プリントの譲渡（新潟県三条市歴史民俗産業資料館）
	保存	資料保管の見直し	岩波写真文庫版下プリント資料の返却（岩波書店）
10月	運営	事務所移転	保存センター事務所移転
	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	会議	諮問調査委員会	令和4年度上半期報告・下半期の計画
	会議	支援組織	令和4年度上半期報告・下半期の計画
11月	調査	利活用	「写真協会」原板を活用した企画協議
12月	会議	写真保存センター委員会	寄付募集方法の協議
	会議	写真保存センター委員会	写真原板データベース公開中画像の画像補正基準の協議
1月	調査	資料保管の見直し	共進倉庫保管資料（プリント類）の調査
	収集	写真原板の収集	広島平和記念資料館
	権利処理	業務委託契約の締結	広島平和記念資料館
2月	会議	関係者合同会議	写真原板データベース画像掲載に関する協議
	会議	写真保存センター委員会	原板収集時の寄贈契約書内容とデータ制作手数料の協議
	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
3月	会議	関係者合同会議	高精細画像データ保存方法の検討
	報告	報告書作成	令和4年度事業報告

山崎 正典（事務局長）

5 本年度収集・調査した写真原板について

5.1 本年度の写真原板の受入数及び保存庫入庫数

5.1.1 受け入れた写真原板資料の概要

本年度は2名・団体、540点の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表1の通り。受入数は初期調査時の概数で記す。

表1 令和4年度写真原板資料受入概要

撮影者・団体名	受入日	受入数		概要
		初期調査 未点数	初期調査済 点数	
笹本恒子	2022年5月9日	—	538	『きらめいて生きる明治の女性たち 笹本恒子写真集』『素顔の三岸節子 60余年の思いをこめて』など
広島平和記念資料館	2023年1月10日 1月23日	—	2	広島原爆被害の様子など
合計2名・団体		—	540	

5.1.2 保存庫へ入庫した写真原板の概要

本年度の国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への写真原板の入庫作業は2022年6月16日、10月20日、2023年2月22日の3回行い、計29,462点を収めた。写真原板の入庫内容は表2の通り。

表2 令和4年度写真原板入庫内容

撮影者名	入庫原板数
秋山忠右	1,280
和木光二郎	303
杵島隆	194
岩宮武二	1,028
岩波写真文庫	11,152
高木康允	276
高野伸二	3,615
芸艸堂	391
ブリストル, ホレス	846
杉村恒	2,528
奈良六大寺大観	5,115
大和古寺大観	1,804
醍醐寺大観	217
平等院大観	711
広島平和記念資料館	2
合計 15 名・団体	29,462

5.1.3 年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで87名・団体、約347,677点の写真原板資料を受け入れた。そのうち国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫へ収めた写真原板は159,983点。調査中・未処理の写真原板は187,694点。年度別の各作業処理数は表3の通り。また、調査を開始してから現在までにデジタル化した写真原板の数は78,933点になった。

表3 年度別各作業処理数（2023年2月28日現在）

年度	写真原板受入数	相模原入庫数	調査中・未調査数	デジタル化した写真原板数
平成21年度	28,712	—	28,712	4,775
平成22年度	25,626	—	54,338	1,369
平成23年度	41,203	—	95,541	6,988
平成24年度	4,470	8,901	91,110	2,208
平成25年度	3,523	15,139	79,494	2,560
平成26年度	40,258	24,179	95,573	4,038
平成27年度	61,523	7,210	149,886	5,062
平成28年度	11,000	5,263	155,623	4,372
平成29年度	91,551	9,229	237,945	3,969
平成30年度	343	12,608	225,680	2,739
令和元年度	24,229	8,501	241,408	2,782
令和2年度	12,240	21,247	232,401	11,154
令和3年度	2,459	18,244	216,616	13,782
令和4年度	540	29,462	187,694	13,135
合計	347,677	159,983	187,694	78,933

笛木 諭（調査員）

5.2 本年度収集・調査した写真原板 総論

5.2.1 笹本恒子 公益社団法人日本写真家協会名誉会員（2022年107歳で逝去）

手元に「100歳のファインダー 笹本恒子・日本初の報道写真家」と題し平成26年に東京新聞から出版された写真集がある。表紙は、カラーでカメラを持ちレンズに向かい100歳の笹本恒子が微笑んでいる。この写真集は大正に生まれ昭和初期から平成、令和と三つの時代を跨いだ長年に及ぶ報道写真家笹本恒子の足跡が、恰も彼女が歩んだ激動の戦前、戦後をニュース写真で追うようにダイジェストで編纂されていて見応えがあり貴重な歴史的写真資料とも言える。

大正3年、品川に生まれた彼女は昭和14年25歳の時、当時国策のPR誌であった「写真週報」の内閣情報部員として創刊に関わり写真協会にいた知人から女性報道写真家への誘いを受けて入社し、カメラの使い方も分からないまま日本初の女性報道写真家になった、という。

このころ我が国はアメリカとは国交断絶に近い状態であった。一方、ヨーロッパではドイツのヒトラーがポーランド、チェコへと侵略戦争を始めていた。日本もドイツ、イタリアと三国同盟を結び戦時体制に入り戦争前夜の不穏な時代であった。その年に笹本恒子は、ビルマ要人の来日写真や日米学生会議（翌年日米開戦）、日独伊三国同盟婦人祝賀会などを撮影している。

大阪駐在員としてヒトラーユーゲントの撮影、スペイン経済使節団のレセプションなど歴史的場面にも立ち合い撮影している。しかし昭和16年に写真協会を退社して結婚、家庭に入り一時カメラから離れるが昭和21年に婦人民主新聞の嘱託となりフリーランスとなって再び写真家として新聞、雑誌などに写真と記事を提供する忙しい日々を過ごしている。太平洋戦争で荒廃した戦後の世相を笹本恒子は果敢な行動力で焼跡の銀座風景や東芝ゼネスト（昭和21年）、銀座裏のバーでたむろする進駐軍兵士（昭和25年）、逢瀬を楽しむ日本女性と進駐軍兵士とのスナップ（昭和25年）など多くの社会派的写真を撮影している。一方で少女歌手の美空ひばり（昭和25年）や日劇の舞台で歌い踊る笠置シズ子（昭和24年）など華やかな舞台にもレンズを向けていた。昭和25年にはプロの写真家集団として設立された日本写真家協会の創立会員となり、いよいよ本格的に報道写真家として活動を開始するのである。昭和27年には、女性だけが招待されたストリップショウを撮影し、興味津々で見る婦人と全く無関心な婦人を捉えている。二つの表情には戦後女性の内心が伺えて時代背景を知る上で大変興味深い写真だ。昭和28年に広島原爆ドーム撮影。昭和25年から28年にかけて撮影された街頭スナップにはサンドイッチマンや街の宝くじ売り、焼き鳥屋、美容室、とげ抜き地蔵の群衆など庶民の日常を丹念に追ったスナップ写真が多数あり、当時の世相や社会を知る上で大きな手がかりになる。他方、昭和33年に第4回原水爆禁止世界大会、同年警職法改正反対デモ、昭和35年三井三池闘争で「去るも地獄残るも地獄」と苦悩する闘争本部写真や昭和35年の安保反対を撮影。更に全学連の反対デモで警察と衝突で死亡した女子大生樺美智子さんの追悼集会で撮った“虐殺抗議”の看板とデモ隊の一枚などは写真家笹本恒子の怒りを感じる。旺盛な活動後約20年のブランクを経て昭和60年、71歳で写真展「昭和史を彩った人たち」を開催。そこには昭和24年から撮影を始めた、時代を彩った様々な著名人の何気ない日常の姿が撮影されている。これは昭和63年写真集「ふだん着の肖像」（新潮社）として出版されている。続いて5年後の平成2年76歳で笹本恒子は「明治生まれの女性たち」の撮影に取り組む。“当時の女性には参政権もなく、家事をしながら苦勞してその道の第一人者になる。その彼女たちの姿を残す事こそ大正生まれの自分の責務”との思いで各界100人の女性の風貌を追った。数名挙げると作家・壺井栄、社会事業家・澤田美喜、俳人・中村汀女、女優・杉村春子、社会評論家・石垣綾子、洋画家・三岸節子、歌手・淡谷のり子など、どの作品にもその道に生きる女性の自信と気概が捉えられている。この作品に5年をかけて完成させた彼女は、芯

の強い日本女性の精神を称え、国破れて荒廃した国土の中から立ち上がる明治女性の気概を伝えているようだ。

平成23年には97歳で「吉川英治文学賞」を受賞。平成26年には「笹本恒子100歳」展を開催。102歳（平成28年）で写真界のアカデミー賞と言われた優れた写真家に贈られるアメリカの「ルーシー賞」を受賞。このようにして笹本恒子は日本初の女性報道写真家として社会派的写真と人物写真で渾身の作品を残し、多くの写真集と展覧会、著作物、数々の受賞など大きな業績を遺し、令和4年8月107歳の長い人生を終え静かにこの世を去った。

日本写真保存センターでは、これら一連の現代史の集積とも言うべき写真フィルム1,970本と多数の引き伸ばしプリント、文字資料をご遺族から寄贈を受け貴重な歴史的記録映像を保存することになった。

飯島 幸永（公益社団法人日本写真家協会理事）

5.3 調査した写真原板詳細

5.3.1 受入継続中の写真原板詳細

昨年度までに受け入れた写真原板のうち、本年度も引き続き受け入れを行った写真原板について記す。写真家のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、写真原板の特徴のみを記す。

笹本 恒子（ささもと つねこ）

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2022年5月9日に135判モノクロ・カラーネガを中心に538点を受け入れた。

○原板の内容

撮影時期は1940～2010年代。撮影内容は高松宮夫妻、九重年支子、ギリヤーク尼崎、藤沢嵐子、水谷八重子、宮操子、小山ひさ子、長岡輝子、三岸節子、里見宗次、塚本実、加藤シヅエなどの人物写真や、戦後最初のファッションショー、生きたニュールック展1950年、フラワーデザイン、フランスヴァンセンヌの芸術家の家、石神井公園、深大寺、田園コロシウム、薪能1947年頃、浅草スポーツランドなど。書籍に関しては『きらめいて生きる明治の女性たち 笹本恒子写真集』（清流出版1996年）の一部が複製された原板や『素顔の三岸節子 60余年の思いをこめて』（光村印刷1998年）、『100歳のファインダー』（東京新聞2014年）に使用されていると思われる原板があった。

○原板の状態

年代相応の経年劣化が起きている。そのなかにはビネガーシンドロームが特に進行している原板が数点あり、乳剤面が溶解し包材と固着、細く丸めた紙のようにカーリング、ベースが脆くなり砕けているなどの症状が出ていた。

広島平和記念資料館（ひろしまへいわきねんしりょうかん）

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2023年1月10日135判モノクロネガ1点30コマ、2023年1月23日に135判モノクロネガ1点20コマ、合計2点50コマを受け入れた。

○原板の内容

撮影者は岸田貢宜と林重男。撮影時期は岸田貢宜が撮影した原板は広島に原爆が投下された翌日の1945年8月7日から12日、林重男が撮影した原板は1945年10月1日から10日の間に撮影されている。撮影内容は両原板とも広島の前爆被害の様子を写している。

○原板の状態

年代相応の経年劣化が起きている。また、岸田貢宜の原板は若干カーリングしていた。

笛木 諭（調査員）

6 スキャン画像高画素化への取り組み ―利活用拡大へ向けて―

6.1 背景

保存センターでは写真原板の収集と調査・保存を積極的に進めてきたが、データベースでの公開や画像貸出しによる利活用を今よりも促進するためには、様々な用途に対応できる画像データを作成することが必要との判断に至った。

・高画素化について

従来、保存センターのデジタル画像はフィルム全体のスキャンが中心（図1）。35mm フィルムの1画像あたりの大きさは1152×780px程度。モニターで確認するには十分であるが、貸出先で印刷するには解像度不足。印刷に耐える解像度で画像データ化する事が今回の趣旨である。

1152pxをA4長辺に印刷した場合98.5dpiになる。印刷に必要な解像度350dpiとの比較が図2である。

・すぐに使える体制の構築

従来、印刷使用の為に再スキャンするにはフィルムを相模原分館から取り寄せる必要があり、取り寄せる機会は年3回という状況。画像を使いたい時に使う為にも全ての画像を高画素化する必要がある。

・高画素化の順番について

保存センターが収集した写真原板は30万本を超え、優先順位をつける必要がある。新たにデジタル化する画像は最初から高画素化する。スキャン済みの写真は使用可能性の高いものから高画素化する事とした。

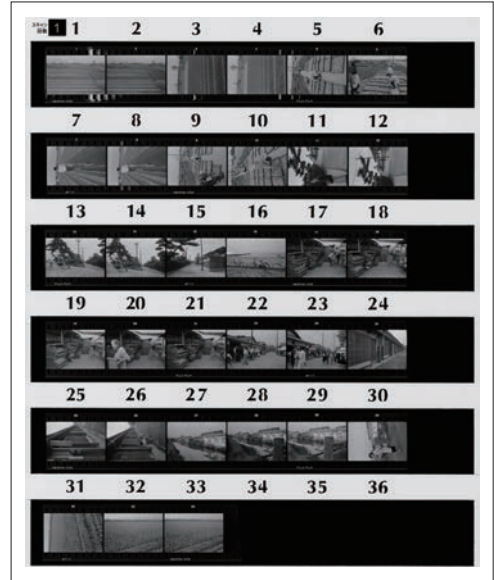
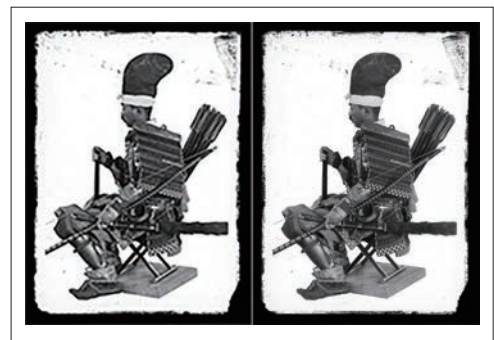


図1 スキャン画像



98.5dpi 350dpi

図2 画質比較

6.2 仕様の策定

一般使用と研究目的では要望に違いがあり、両方の要望に応える必要がある。

・一般使用

需要の大半はA4（4093×2894px／175線350dpi）以下である。モニターも4K画質（4096×2160px）は確保したい。従って写真部分の画素数は4096×2894px以上とする。

なお、画素数は概ねである。フィルムカメラの画面サイズはデジタルカメラほど厳密ではない。カメラによって画面の大きさが違う。同じカメラでも広角レンズと望遠レンズによって画面の大きさが変わる。

通常貸し出される画像は完成品と考えトーン調整しないのが一般的である。Web公開する画像は調整後の画像を公開する。

・研究目的

フィルムに書かれた文字（図3）は研究者にとって手掛かりとなる。変形したフィルム（図4）や劣化したフィルム（図5）も研究対象となり得る。従ってフィルムの周囲も含めてデータ化する必要がある。

・4コマ撮り／合理化の試み

35mm フィルム 36 枚を 1 コマずつ撮ると 1 日 27 本が限界であった。週 5 日、50 週で年 6750 本。未スキャン画像約 11 万本の全てが 35mm ではないが、16 年かかる計算。人も機材も限りがある中、1 コマずつ撮る手法は現実的ではない。1 億画素のカメラと 4×5 用のガラスキャリアー（図6）を使い 35mm フィルムを 4 コマずつ撮る事（図7）で 1 日 100 ～ 120 本を達成した。1 日 100 本で年 2 万本。イメージ部分 A4 画質（4341×2894px、1256 万画素）とフィルム周囲撮影の両方を満たしている。6 コマ撮影、9 コマ撮影も検討したが画質、速度面で 4 コマ撮影に優位性があった。

・ブローニー、大判について

1 コマずつ撮影する事とした。

ブローニーフィルムで 100 本／日。6×6 サイズのイメージ部分 7363×7363px、5421 万画素。

大判フィルムで 200 枚／日。4×5 サイズイメージ部分 9822×7858px、7718 万画素。

ブローニーサイズは一度に 2 コマ撮る事が可能な事もある。しかしコマ間が不揃いの為撮れない事もある。入れ直す手間で、1 カットずつ撮るのと時間的に差が無かった。1 カットずつ撮る方が画素数が多いので 1 コマ

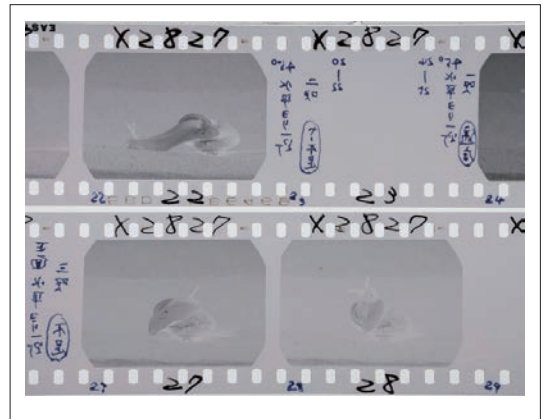


図3 文字の書かれたフィルム

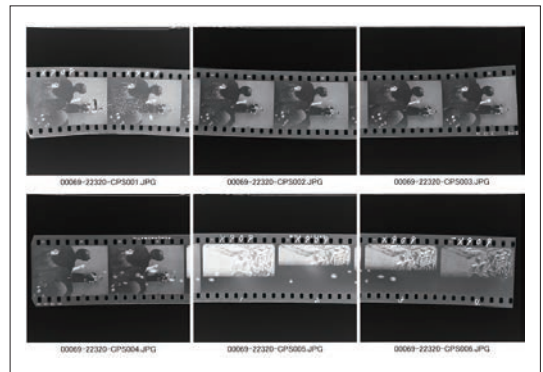


図4 変形したフィルム



図5 劣化したフィルム



図6 4×5 用ガラスキャリアー



図7 1 億画素カメラ 4 コマ撮り

撮りとした。

- ・コンタクトシート

35mm 4コマ撮り、ブローニー 1コマ撮りで共にコンタクトシートを作成（図 8）。スキャンと似た形で写真を探せるよう配慮する事とした。

6.3 撮影手法（2 種）

- ・デュプリケーター方式（図 9）

主に 35mm、ブローニー、4×5 で使用。特殊な例として 16mm 映画フィルム（図 10）、35mm 映画フィルムにも使用した。

アンチニュートンガラスでフィルムを挟む為平面性が高く、隅々までピントの合ったデュープが出来る。磁石で圧着する為、カーリング（図 11）にもかまぼこ型程度であれば対応できる。

ガラスは 4×5 まで対応する為、35mm フィルムを 3 本並べる広さがある。2 本を並べる際も、曲がったフィルムなど柔軟に対応できる利点がある（図 6、図 4）。

- ・複写台方式（図 12）

収蔵した原板のなかに 10×12 インチ（四つ切）（図 13）とキャビネ判（図 14）のガラス乾板があり、複写台を使って撮影した。

デュプリケーターと同じガラスを用意。このガラスはニュートンリングが全く出ない。

キャビネ判 370 枚、四つ切 20 枚が 3 日であった。撮影法の試行錯誤を含めると更に数日が必要である。映画用フィルムや強いカーリング、朽ちたフィ

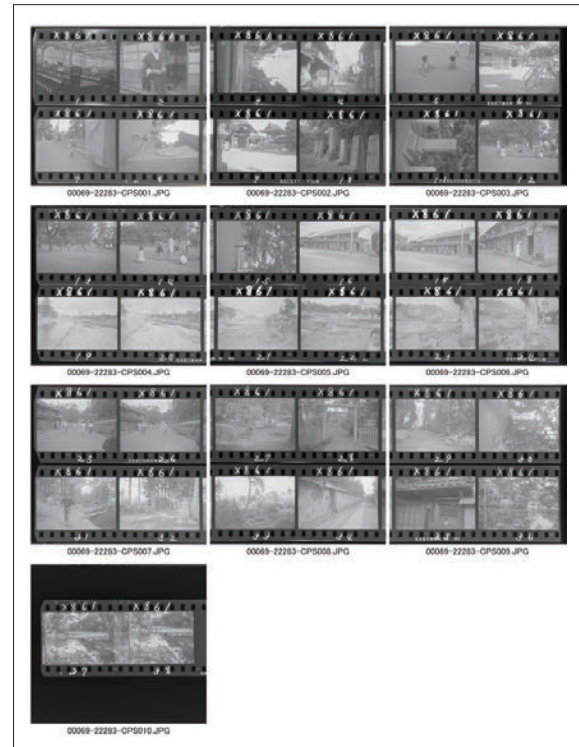


図 8 4コマ撮りコンタクトシート

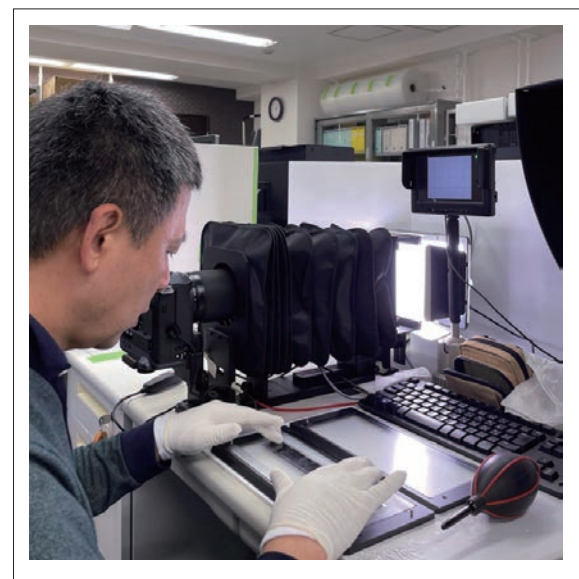


図 9 デュプリケーター方式

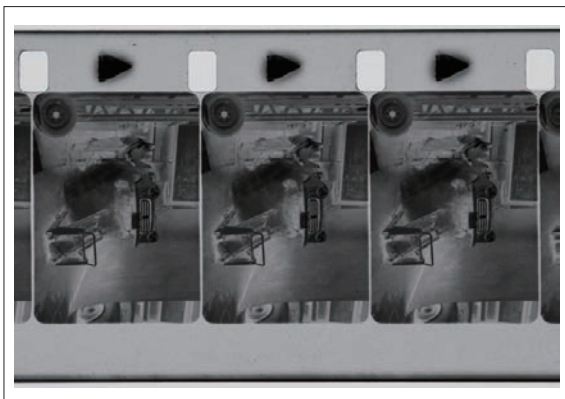


図 10 16mm 映画フィルム

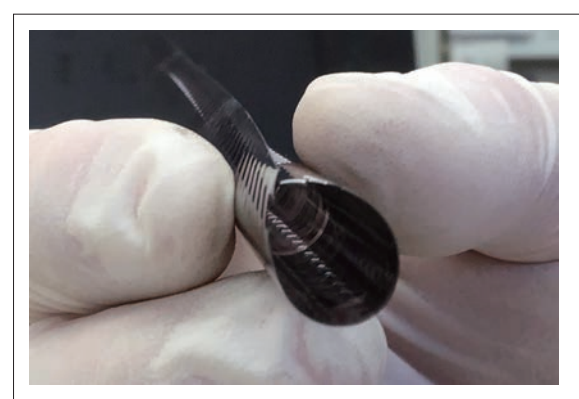


図 11 カーリングしたフィルム



図 12 複写台方式

ルムなども撮影法研究の時間が必要であった。

6.4 撮影の工夫

- ・スキャン方式では1作家を一人が担当。スキャン、包材入れ替え、メタデータ入力を行った。撮影方式では分業制とした。単純な比較はできないが、効率は上がったように思われる。

- ・撮影データはRAW+Jpegとし、PCへ転送。休憩時にコンタクトシートを作成する事で待ち時間を無くした。PCがコンタクトシート作成処理中でも、撮影しカメラからPCへデータ転送は可能である。

6.5 コンタクトシートの大量作成（図8）

1日に撮影する画像は1000枚程になる。丁寧に手作業で行いたい気持ちもあるが、写真集使用カットと照合するのが目的である。作業を自動化して大量に処理するのが望ましい。収蔵した30万本全てを公開する訳ではない。手をかけるのは公開する画像とするのが合理的である。

撮影した画像の大半はネガ像（図15）である。写真照合する画像はポジ像が良い。現像ソフトでポジ像にする（図16）必要がある。

当初使っていたPCで750枚を現像するのに30分を要した。加えてコンタクトシート作成工程で編集ソフトの処理待ちとなり作業者が合計1時間20分程度PCが使えない状況があった。限られた勤務



図 13 10×12 インチガラス乾板



図 14 キャビネ判ガラス乾板



図 15 現像ソフト ネガ像



図 16 現像ソフト ポジ像変換

時間で見過ごせない時間である。

Jpeg は RAW より現像時間が短い。コンタクトシートは照合ができれば良い。現像ソフトのポジ像変換、簡易的な自動補正で良いと割り切る。撮影で RAW と Jpeg の同時撮影とした。速い PC を使い、Jpeg を現像、休憩時間を使う事で待機時間を 0 にした。

以上により、毎日 100 枚のコンタクトシートを仕上げるワークフローができた。

6.6 今後の課題

写真の解像度と手法は定まった。しかし利用に供するまでには多くの工程がある。写真原板の包材入れ替え（図 17）、写真の整理、文字データの記入、有用な写真の選定、トーンの調整、アップロードなど多くは手作業である。保存センターにはまだ 20 万本近い未処理原板がある。新たに原板を収集しなくても 10 年近くかかる試算もある。写真集に使われたカットなど価値を認められた写真を優先的に処理し、早期公開を実現する。あるいは価値判断ができた写真にのみに限定し、評価の定まらないカットは預かった形で保存する事も検討する必要もあるだろう。また、設備面においても画像品質を維持するためパソコンやモニター、環境光などの見直しも進めていきたい。

限られたリソースを十二分に活かし、原板を託して頂いた方の想い、利用を待ちわびる社会の要請に応えるためにも一層の高品質かつ合理化を図りたいと考えている。



図 17 包材入れ替え

野田 知明（公益社団法人日本写真家協会会員）

7 情報発信

「日本写真保存センター」が収集、保存している写真原板はフィルムやガラス乾板であり、大正期から平成期に撮影されたものである。よって、このほとんどが50年以上経過し、保存状態が良くなかった原板はかなりの劣化が見られる。このような写真原板自体の保存方法についてこれまで保存センターでは研究を重ね、セミナーやパンフレットなどで原板保存方法を発信してきた。撮影媒体はデジタル化が進み、フィルムを使用していた写真家の高齢化によって、残されているフィルム原板は今後減少してくることは間違いない。今後も保存センターでは貴重な記録である写真原板の保存の必要性和保存方法を継続して発信していくことが役割であると考えている。

一方、調査した写真原板はデジタルデータ化により「写真原板データベース」（閲覧データベース）において公開している。保存センターが保存している原板の中には、太平洋戦争前から戦後の高度成長期の貴重な歴史の記録や人々の暮らし、風土、文化財、建築物、著名人など他で見られない貴重な画像が多くある。

これらの存在を広く知っていただき、見ていただく方々の知識や研究に役立て、時には出版物やテレビ番組でも利用いただき、より多くの人の目に留まるような活用提案をしていく必要がある。

7.1 本年度の情報発信と利活用

本年度の写真原板データベースへの追加コマ数は2,329コマで、累計で22,742コマとなった。この中には中国新聞社および広島平和記念資料館の協力を得て、様々な媒体でも利用・公開されている広島原爆関係の写真も含まれる。新規公開はこの2団体のほか、杵島隆、佐伯義勝、高野伸二、芸艸堂（風俗研究会）が加わった。芸艸堂は大正時代にガラス乾板で撮影された原板で、保存センターが収集した最も古い時期のものである。

ジャパンサーチとの連携、活用においては、昨年度より利用開始した「ギャラリー」において様々なテーマで画像を紹介し、見て、知って、楽しんでいただいている。本年度は4件のテーマを紹介し、通算では7件となった。保存センターが公開している他の画像にも興味を抱いていただき、更なる利活用につながることを期待している。

また、ジャパンサーチのオンラインイベント「デジタルアーカイブフェス 2022 ジャパンサーチ・デイ」にも参加し、連携機関や今後連携を検討している機関にも保存センターの存在を紹介し、これら機関にもデータベースを利用いただくようPRした。

画像利用については、テレビ報道・番組やイベント展示、出版、学校関係など様々な分野からあった。今後の利用拡大や様々な用途に対応できるよう、デジタル画像作成の高精細化にも取り組んでいる。また、写真原板データベースで公開している画像の画質については、これまでは原板の撮影状態に準じてオーバーやアンダーなどそのままの状態に掲載していたが、より見やすい画像に補正して掲出する方針に変更した。画像補正の終わったものから順次差し替えを行っている。また、権利関係の処理が済んでいない画像に関しては、撮影情報は掲載しているが、画像は「No Image」として非公開中である。この方針は変わらないが、表示文字を変更して掲載することとした。

7.1.1 ウェブサイト

ウェブサイト（<https://www.photo-archive.jp/>）では、日本写真保存センターでの写真原板保存・アーカイブ化の取り組みを紹介するほか、写真原板データベース（閲覧DB）の更新情報や、ギャラ

リーページの更新情報を発信するなど活動報告を行った。

7.1.2 写真原板データベース（閲覧 DB）

7.1.2.1 本年度閲覧 DB に追加した原板情報

閲覧 DB に 2,329 コマの原板情報を追加し、公開原板数は合計 22,742 コマとなった。

追加した情報の詳細

撮影者・団体名	コマ数	掲載媒体タイトル
秋山忠右	59	写真展 くになかい 一目に見えない境界線—2009 年 秋山忠右・佐藤晴雄写真展 BRASIL.1908, ニコンサロン, 1977 年
杵島隆	525	『義経千本桜』
岩宮武二	123	『ボロブドゥール 岩宮武二写真集』
岩波写真文庫	1,221	『ねずみの生活』『ギリシアの神々』『徳島県—新風土記—』『鉄 と生活』『子供の絵』『北陸路』『白山』他
中国新聞社 (松重美人)	13	『夕刊ひろしま』『LIFE』『原爆第 1 号ヒロシマの写真記録』『中 国新聞』など多数
広島平和記念 資料館 (木村権一、深田 敏夫、林重男)	26	『広島壊滅のとき—被爆カメラマン写真集』『中国新聞』『読売 新聞』『毎日新聞』など 広島平和記念資料館常設展示
佐伯義勝	25	『週刊ポスト』男の料理
高野伸二	121	『野の鳥の四季・高野伸二写真集』『日本産鳥類図鑑』
芸艸堂 (風俗研究会)	216	『歴代風俗写真集』
本年度新規公開	2,329	

7.1.2.2 閲覧数の推移

本年度の閲覧データベースの PV 数は 17,577 件、UU 数は 2,270 人であり（2022,4,1～2023,1,31）、月平均 PV 数 1,758 件、UU 数 227 人であった。昨年度の月平均 PV 数 1,849 件、UU 数 233 人（2021,4,1～2022,3,31）と比較して、月平均 PV 数 95.1%、UU 数 97.3% とやや減少した。今後も閲覧数を増やしていくために、ジャパンサーチに取り上げる頻度を上げたり、その時々話題性のあるような写真を掲載していく。また、日本写真保存センター自体のホームページも長年変わっておらず、SNS の活用も含めて来年度以降に見直しを進める。

7.1.2.3 利用問い合わせページの作成

2022 年 3 月に日本写真保存センターウェブサイトにも原板利用希望者向けの問い合わせページを作

成し、写真原板データベース（閲覧 DB）に、ページへのリンクを設置した。

ページでは商用利用者・教育目的利用者への利用条件を提示すると共に、問い合わせフォームを設置した。このサイトからの利用問合せ件数は 2023 年 2 月末までに 15 件あった。

まだ日本写真家協会事務局の問い合わせ窓口への連絡件数の方が多いが、保存センターウェブサイトでは、利用希望画像のコマ番号が明確であり、希望者の利用目的や利用希望時期、画像データの必要サイズなど、貸し出しの際に必要な情報が事前に記入されてくるようになり、連絡がスムーズに行えるようになった。

7.1.3 ジャパンサーチとの連携

本年度も引き続きジャパンサーチとの連携を行った。

本年度も、ジャパンサーチの「ギャラリー」機能を使用して、サイト内で日本写真保存センターが公開している画像の一部をテーマ毎にまとめて紹介するページを 4 つ作成した。

ギャラリーは、保存センターの公開資料のみならず、ジャパンサーチ上で検索可能な資料やその他の web 上の情報資源を利用してページを作成できる機能である。

作成したギャラリーでは、保存センターが公開する写真原板資料の他、関連資料を並べて表示するなど、写真原板資料を入り口として、閲覧者が様々なデータにアクセスできるよう構成した。保存センター作成のギャラリーを入り口として閲覧者がジャパンサーチ内を回遊し、デジタルアーカイブそのものへの親近感を持ってもらうことで、ジャパンサーチ全体の認知度向上や、保存センターが公開する資料の利活用の促進を図る。

作成したギャラリーの一覧

- ・素顔の首相 (2022,4)

高木康允が撮影した総理大臣経験者の表情を、関連資料とともに紹介。

<https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-sugaonosyusyo>

- ・空中写真で見る 変わりゆく東京の風景 (2022,6)

秋山忠右撮影の写真集『空撮大東京』掲載写真を関連資料とともに紹介。

https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-tokyo_aerial_view

- ・岩波写真文庫 247 徳島県 一新風土記— (2022,7)

『岩波写真文庫 247 徳島県 一新風土記—』掲載の写真原板を本文に沿って紹介。

<https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-iwanami247tokushima>

- ・『写真週報』掲載写真と関連資料で見る戦時下の子供たち 2 (2022,8)

『写真週報』に掲載された子供たちのイメージを関連資料とともに紹介。

<https://jpsearch.go.jp/gallery/photoarchive-syuhou002>

7.1.4 セミナー

国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局主催のセミナーにて、写真原板データベースとジャパンサーチとの連携と活用について報告を行った。

名称：デジタルアーカイブフェス 2022 ジャパンサーチ・デイ

日時：2022年8月25日（木）10:00~17:30

会場：オンライン

主催：国立国会図書館、内閣府知的財産戦略推進事務局

プログラム＜抜粋＞

第1部（基調講演）

（1）基調講演

アナログ歴史家とデジタルアーカイブの出会い ～ジャパンサーチへの期待

歴史家／国際日本文化研究センター教授 磯田 道史

（2）デジタルアーカイブ社会の実現にむけた取組について

内閣府

（3）デジタルアーカイブジャパン・アワード

進行：実務者検討委員会座長／国立情報学研究所名誉教授 高野 明彦

第2部（ジャパンサーチセッション）

（4）ジャパンサーチ・アクションプラン 2021-2025 について

国立国会図書館

（5）ジャパンサーチの概要と連携方法について

国立国会図書館

（6）ジャパンサーチ連携事例・活用事例報告

日本写真保存センター「写真原板データベース」

日本写真保存センター調査員 河原 健一郎

7.1.5 利活用

写真貸出しは、松重美人（中国新聞社）、笹本恒子、片山攝三、渡辺義雄、稲越功一、野上透、杉村恒、石松建男、名取洋之助（岩波写真文庫）などが撮影した写真の利用希望が、放送局、出版社、イベント企画会社、学校関係、美術館などからあった。

利用目的は、テレビ番組、写真展や展示会、イベントでの掲示、教科書・雑誌・図録掲載、新聞記事など多岐に渡るが、笹本恒子さんが亡くなったこともあり、同氏の追悼テレビ番組用の貸出し利用が目立った。松重美人（中国新聞社）の広島原爆投下後の写真は、本年度も8月の終戦の日前後での利用が多かった。

山崎 正典（事務局長）

8 支援組織

日本写真保存センターは、2006年に設立発起人会を開催して、「日本写真保存センター設立推進連盟」を設立したところから始まった。代表には森山眞弓、副代表に田沼武能が就任して文化庁に「設立要望書」を提出した。2007年には文化庁は「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を委嘱事業として予算化（約900万円）し、日本写真家協会が受託した。その後より活動が本格化し、フランス・イギリス・アメリカ等のフィルム保存している施設調査も実施した。

2011年から「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」（約1,800万円に増額）に発展し、収集・保存調査の他にアーカイブ構築に関する調査にも着手した。保存調査を終えた写真原板は、2012年には文化庁から貸与を受けた東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館（現「国立映画アーカイブ相模原分館」）に収蔵できることになった。

そして2014年に写真原板の調査研究をサポートする支援団体の組織を立ち上げ、支援組織も2022年度で9年目に入った。本年度は、保存センターの事務所経費を支援していただいている会員との協議により、作業事務所を台東より神田に移転した。

支援組織の設立から現在までの経過と現状について報告する。

8.1 支援組織設立の経緯と支援組織会員

保存センターの本格的な活動が始まり、取り扱う写真原板の数量が増加するにつれ、調査活動に必要な要員や資金が拡大していった。文化庁から事業費が出ているものの、これだけでは調査活動に限界が生じてきた。そこで、「日本写真保存センターの事業活動に賛同して活動を支援いただくための組織」を立ち上げるため、公益社団法人日本写真家協会とキヤノン株式会社、株式会社ニコン、富士フイルム株式会社の4者が支援組織の役割や支援内容をまとめ、日本写真家協会の賛助会社を対象に支援組織会員への参加を呼びかけた。

結果、賛助会社は写真や印刷に関連する企業が多く、写真原板の保存や利用に関する意義の理解が得られやすかったため、初年度となる2014年には12社が会員となり支援組織が立ち上がった。

2022年度では11社1団体の12会員に支援いただいている。

- ・支援組織会員（2023年3月時点 11社・1団体の12会員）

株式会社アイデム

エプソン販売株式会社

株式会社キタムラ

キヤノン株式会社

株式会社シグマ

株式会社写真弘社

株式会社タムロン

凸版印刷株式会社

株式会社ニコン

一般社団法人日本写真著作権協会

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

株式会社フレイムマン

(50 音順)

8.2 支援組織の沿革

- 2013 年 06 月 支援組織準備の 3 社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）と協議会
2014 年 01 月 支援組織立ち上げ及び保存センター実務責任者をキヤノンから派遣
2014 年 05 月 公益社団法人日本写真家協会の賛助会員に説明会実施
2014 年 10 月 支援組織会社 12 社による初の「支援組織会議」を開催
2015 年 04 月 支援組織が 14 会員となる（1 社・1 団体増）
2015 年 08 月 「原爆展」（展示：JCII サロン）に支援会社が協賛
2016 年 04 月 支援組織が 13 会員となる（1 社減）
2016 年 11 月 「渡辺義雄展」（展示：ポートレートギャラリー）に支援会社が協賛
2017 年 03 月 保存センター実務責任者が支援会社のニコンから着任し責任者交代
2017 年 06 月 「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」見学会に支援会社 3 社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）から 10 名が参加
2018 年 03 月 「後世に遺したい写真」（展示：みなとみらいギャラリー）に支援団体が協賛
4 日間の写真展開催に約 7,000 名が来場
2018 年 06 月 「国立映画アーカイブ・相模原分館（2018 年 4 月に独立）」見学会に支援会社 4 社（凸版印刷株式会社、オリンパス株式会社、株式会社写真弘社、株式会社キタムラ）と文化庁から合計 10 名が参加
2018 年 10 月 「後世に遺したい写真」写真展・講演会（光村グラフィック・ギャラリー）
10 月 25 日～11 月 24 日の開催期間中 1,100 名が来場
2019 年 01 月 「日本写真保存センター作業分室」を日本写真著作権協会の支援により台東区台東に開設
2020 年 03 月 保存センター実務責任者が支援会社の富士フイルムから着任し責任者交代
2021 年 04 月 支援組織が 12 会員となる（1 社減）
2022 年 10 月 「日本写真保存センター作業分室」を千代田区神田紺屋町に移転

8.3 支援組織の支援内容について

支援組織からの会費支援は、具体的には調査作業室の整備、調査員の人件費や活動費、原板の長期保存の為に包材費、備品調達などの費用の一部に充当している。また日本写真保存センター調査活動を広報するためのセミナーや講演会などの活動費にも使用している。

支援組織の 3 社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）については、本年度まで事業運営に必要な要員支援を受けてきた。具体的には 3 社のうち 1 社からほぼ 3 年ごとに常勤の管理者（事務局長担当者）1 名を日本写真保存センターへ派遣いただき、日常の管理業務を依頼していた。過去の実績として、キヤノンより 2014 年 1 月から 2017 年 4 月まで、ニコンより 2017 年 3 月から 2020 年 3 月まで、富士フイルムより 2020 年 3 月から 2023 年 3 月まで事務局長が派遣されてきた。ただし、この 3 社からの継続派遣は 2023 年 3 月をもって終了し、4 月以降は日本写真家協会が採用する管理者を置くことになっている。

また、一般社団法人日本写真著作権協会からは、2019 年 1 月に半蔵門本部から移転した日本写真保存センターの作業事務所（台東区台東）を同協会負担で契約いただき借用していたが、2022 年 10

月に日本写真家協会が契約主となり作業事務所を千代田区神田紺屋町に移転した。日本写真著作権協会より引き続き家賃の一部を支援していただいている。

8.4 今後の支援体制と保存センターの改革について

本年度は、新型コロナウイルスによる人流制限が緩和され、写真業界の企業においても業績回復基調が見られるようになった。しかし、昨年から続く半導体の不足や原油価格の高騰からくる原材料費・輸送費などのアップは続いており、支援組織の会員企業の活動にも影響があったと考える。このような状況下でも、本年度も「日本写真保存センター」の活動意義にこれまでどおり賛同いただき、支援継続いただいたことに感謝申し上げる。

保存センターにおいても、本年度は支援会費や文化庁からの委託事業費だけに頼るのではなく様々な経費の見直しを進めてきた。具体的には事務所移転により面積を狭めての家賃削減や、民間倉庫で保管している原板・資料の内容調査による保管数の削減、原板保存に使用する中性紙包材の仕様を変えてのコスト削減などの改革を進めている。

一方で、原板画像のデジタル化と保管においては、今後の利活用を見据えて、高精細なデータ作成に切り替え、それに伴っての撮影機材の新規導入やデータストレージの増強が必要となってきた。撮影機材（カメラ・レンズ）については、現在は支援組織会員より無償貸与いただいているが、その他の機器については予算の捻出にも工夫が必要となってきた。

保存センターがこれまで収集した未調査および調査中の原板の中にもまだまだ歴史的・文化的に貴重な画像が多数存在している。少しでも早く、少しでも多く原板の調査作業を進めて相模原分館へ入庫し、劣化を抑えるとともに恒久的な保存を図っていかなければならない。また、写真原板データベースでの公開コマ数を増やし、検索しやすい、情報が多い、見て楽しいデータベースを作り、利活用に役立てていかなければならない。

そのためにも、保存センターの活動意義に賛同いただける新たな支援会員や機材提供をお願いできる企業の獲得に努力したい。また、来年度より寄付の募集を検討し、今後も安定的に業務遂行ができる体制を作っていく考えである。

山崎 正典（事務局長）

9 まとめ

令和4年度は、第8波と言われるコロナ禍の影響もあって広報関係の保存セミナーや写真展は、企画内容の決定や会場の確保などが難しく開催を見送った。会議もリモート会議となったが毎月定例の写真保存センター委員会を開催して保存業務を担当する各委員と課題を話し合い問題の解決に取り組んできた。

昨年6月1日には日本写真保存センター代表であり一般社団法人日本写真著作権協会代表でもあって、本事業の設立を提唱・推進してこれら文化勲章を受章された写真家・田沼武能氏が93歳で逝去された。突然の訃報で、その存在と喪失感は大きかった。

そのような中で保存センターは日常業務を遂行していった。本年度の国立映画アーカイブ相模原分館に収納した原板保存数は29,000本を超えた。総本数は約160,000本となり、順調に収集保存が行われてきた。昨年1月から（一社）日本写真著作権協会との間で月1回の改革協議会を設け原板保存業務全般にわたる事業の進め方や諸経費に対して意見の交換を行い、出来ることから改革を実行に移してきた。

その一つとして10月1日、延べ4年にわたり台東区で業務を行ってきた日本写真保存センターを千代田区神田へ移転し床面積を半分にして賃貸料の大幅削減を図った。同時に調査員の人数や機器について、将来を考えて効率の良い配置にした。

更に包材、民間倉庫代など経費の見直しを徹底して行ってきた。例えば原板収集時に収められている古い包材から新しい中性紙包材に入れ替えるため新包材費がかかっているが、仕様変更により安価にできる方式を考えて使用を予定している。

民間倉庫に関しては、本事業開始当初より今日まで寄贈を受けた原板収集の際、写真家自らプリントした作品や取材手帳、メモ類などの資料が十分に調査、活用できないまま多量に保管されていて、この資料をどう扱うか難しい判断を必要としている。その現状把握のため調査委員6人が倉庫現地に赴き詳しく調査した。今後は資料の存廃基準を設け保管費用の改善を考えている。

本年度は、現在まで大量にある未整理の原板整理を速やかに進めるため新規収集を控えてきた。その様な中でも昨年107歳で逝去した日本初の女性報道写真家として有名であった笹本恒子さん（評論前述）のご遺族から、昭和の戦前戦後と平成、令和と生きた報道写真家のフィルムを追加で寄贈したいとの申し入れがあった。センターで検討した上で、この写された時代背景や当時の社会など多方面から見ても第一級の資料価値があり現代史を知る上で重要な意味を持つ内容と判断し収集した。

また、広島平和記念資料館からは原爆関係ネガ50コマの追加の保存要請があり、国立映画アーカイブ相模原分館へ保存管理した。昨年度にも同資料館が保有する原爆被災直後の写真原板26コマの委託を受け保存している。

利活用については、年々原板保存事業が新聞、雑誌、テレビなどに取り上げられたり名前が表示されたりして知名度が上がるとともに保存事業の重要度も認知されてきている。それに伴う書籍、新聞、その他媒体からの利活用も増えてきている。既に令和5年1月現在で49件があり、前年の46件を上回っている。

今後の課題としては、増えていくフィルム原板とそれに対するデジタル化に伴い周辺機器の整備とサーバーの増設など整備を進め時代に対応して行きたい。又、今日までのWebページのあり方も更に見やすく改善して、写真原板保存事業が広く社会に理解され開かれた存在となるよう努力を傾けていきたい。

飯島 幸永（公益社団法人日本写真家協会理事）

本年度受入れた写真家の作品

笹本恒子（2018年 収集分より）



東京の街頭スナップ「蒸し風呂の営業」

1950-1953 年頃 撮影



東京の街頭スナップ「サンドイッチマン」

1950-1953 年頃 撮影



進駐軍専用のホテルの玄関 神奈川・本牧

1950 年撮影



安保闘争 樺美智子の葬儀 東京・霞ヶ関

1960 年撮影

本年度受入れた写真家の作品

広島平和記念資料館（撮影：岸田貢宜、林重男）



岸田貢宜 1945年8月7日

本通（旧・播磨屋町）から北方の
紙屋町、立町方面を望む



岸田貢宜 1945年8月7日～9日

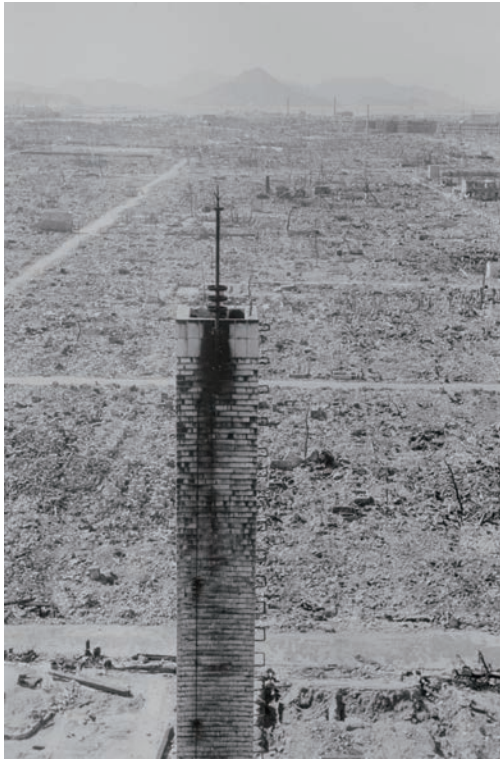
紙屋町交差点付近から南を望む



岸田貢宜 1945年8月7日

広島連隊区司令部、広島地区司令部の
仮事務所

本年度受入れた写真家の作品



林重男 1945年10月1日～10日
中国新聞社新館屋上から南に向って



林重男 1945年10月1日～10日
中国新聞社新館屋上から西に向って



林重男 1945年10月1日～10日
中国新聞社新館屋上から北北東に向って



林重男 1945年10月1日～10日
中国新聞社新館屋上から東に向って

禁無断転載

令和 4 年度 文化庁
「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
報告書

令和 5 年 3 月 公益社団法人日本写真家協会
〒102-0082 東京都千代田区一番町 25 JCIIビル
TEL : 03-3265-7451 FAX : 03-3265-7460
<https://www.jps.gr.jp>
E-mail : info@jps.gr.jp